

氏名	金 慧印
ヨミガナ	キム ヘイン
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第583号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 浅草寺所蔵「水月観音図」の復元研究 一月光の表現について— 〈作品〉 浅草寺所蔵「水月観音像」の想定復元模写 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	宮廻 正明
(論文第1副査)	東京藝術大学	客員教授	()	有賀 祥隆
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	荒井 経
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	藪内 佐斗司
(副査)	東京藝術大学	非常勤講師	()	京都 絵美
(副査)	東京藝術大学	非常勤講師	()	鈴木 晴彦
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

本研究は、浅草寺所蔵「水月観音像」（以下、浅草寺本）において月光を感じさせる表現に着目し、そこにいかなる彩色方法が用いられているのかを実技的な見地から検証し、復元模写による実証を試みるものである。

本研究の対象作品である浅草寺本は、縦141.6×横61.6cmの一鋪の絵絹に描かれた絹本著色一幅の作品である。浅草寺本の水月観音は、独尊水月観音諸本の中にあつて「立像」であることと「大きな緑色の舟形光背」を背負う点が特殊であるため、他の水月観音像にない特異性と芸術性の高さから特別な評価を得ている。

しかし、筆者は、浅草寺本の魅力は独特な図様だけでなく、「月光」を感じさせる彩色技法にもあると考える。そもそも、水月観音像という名称からわかるように「水」と「月」は欠かすことのできない重要な造形要素であるが、水月観音像の中で、直接的に「月」が描かれた作品はきわめて少ない。浅草寺本も「月」が描かれていない作品の一つである。ただし、水月観音像において「月」が間接的に表現されている作例はある。それらには「月」そのものを描かず、水月観音が坐っている岩が水面に近いほど金泥が多用され、水面から遠くなるほど金泥を少なくすることで月光の反射をより具体的に表現し、月の存在を間接的に表しているものがほとんどである。

ところが、浅草寺本を見てみると、直接的に「月」が描かれていないだけでなく、間接的に「月光」の反射を受け止めるために必要な岩などのモチーフさえ描かれていない。水月観音像であるからには、なんらかの方法で「月」が表現されているはずである。具体的な図様として表現されていないとすれば、浅草寺本における「月」はどこに表現されているのか。そこで、筆者は、「月光」を感じさせる彩色表現によって実現されているのではないかという仮説を立てた。この仮説の立証には、先行研究における図様を中心とした考察に加えて、制作当初の彩色表現に関する実技的な復元研究が必要であると考えた。集合像の中に描かれた水月観音と独尊坐像の水月観音は、図様形式が大きく異なるものの、彩色においてはほぼ一致していることが挙げられるが、これは浅草寺本には当てはまらない。それは、浅草寺本の

「月光」を感じさせる彩色表現において他の水月観音像との相違点があるからであると考えられる。

まず、浅草寺本の裙とヴェール、顔貌の部分などには、他の水月観音像と違って白色が多用されている。その独自の彩色表現は、水月観音像の全体の印象を大きく変える重要な役割をもち、「月光」を表現するためのハイライト効果を狙っていたと考える。

また、浅草寺本には「月」の反射光を表現するために必要な岩などのモチーフが省略されており、水面に照らされた月の反射光が上空に向かって暗くなっていく実景の空にみられるようなグラデーションを用いて「月光」が表現されているのである。このことから筆者は、坐像の水月観音像の岩などに用いられた金彩表現の代わりに、水面に接しているヴェールに金泥を多用することで、水面から照り返された月光を表現したのであると解釈した。

以上のように、浅草寺本には「白色によるハイライト表現」「背景におけるグラデーション表現」「金泥を用いた反射光の表現」という彩色技法によって、月夜の闇と「月光」を感じさせる表現が行われていたものと結論付けた。

筆者は、浅草寺本の特異性は時代に共通する表現を越えた特定の絵師の創意によって生み出されたものであったと考える。浅草寺本が数百年の時代を越えた私たちの情感に訴えるのは、浅草寺本に絵師の個性が現れているからなのである。

その絵師の名は浅草寺本の銘記によって知られるところだが、脇侍の水月観音を抜き出して独尊像とし、緑色の舟形光背を背負わせ、通例にない写実性をもった彩色技法を絵師に駆使させた背景には、どのような発願者がいたのであろうか。本研究が行った彩色技法の解明が、浅草寺本もしくは高麗仏画研究の進展に寄与していくことを願う。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、浅草寺所蔵の高麗仏画である「水月観音像」から日本画を志す申請者が直感して受け取った「月光」を感じさせる表現、特に彩色方法に着目し、実技的な見地から検証し、復元模写を制作する過程を詳述したものである。

論文の構成は、四章立てで、前に序論、最後に結論を掲げている。すなわち、第1章・高麗仏画における「水月観音像」について、第2章・浅草寺所蔵「水月観音像」、第3章・浅草寺所蔵「水月観音像」における月光の表現、第4章・想定復元模写制作、である。各章には2節ないし3節の小立てを立てて詳述する。

浅草寺所蔵の「水月観音像」には画中に月が描かれていないのに「月光」を感じさせることとして、次の三点をあげる。一つに金泥が蓮弁の形をした身光の輪郭線や内側に施された暈しをはじめ、左下辺に置かれた大きな蓮の葉に飾られた供養花や珊瑚、宝石、宝珠の輪郭線が金泥でなぞられ、また洲浜の部分は金泥が小さな点のように打たれるなど金泥が画面の下方に至るほど広く使われていること。加えて、金泥による表現は、観音の身を飾る透明なヴェール(薄物)の繊細な文様に白色とともに使用されているところにもみられる。二つには、他の高麗仏画の水月観音像の着衣が多くは典型的な赤色の裾であるのに浅草寺の観音像は白色を多く用いて亀甲文を表わしていること。三つには背景の地色において画面の下辺が明るく、上辺に向って暗くなっていること、などである。地色を蓮染めとし、韓国の江原道江陵で撮影した実景写真では月の反射光が水平線に接するところが最も明るく、上空に向って暗くなっていくのを参考にして、復元模写では下辺から上辺に向って明るい黄褐色から濃い茶褐色にグラデーションをつけて、全体に月光を感じさせるように表現している。

以上のように、本論文は、浅草寺所蔵「水月観音像」を月光下の観音との仮説を立て、検証し、想定模写を制作した論述は正鵠を得たものといえる。

ただし、想定復元模写した作品が誰がみても画面から月光を感じとることができるかどうかは疑問である。

(作品審査結果の要旨)

高麗仏画は、仏教が庇護を受けて隆盛した高麗時代（918－1392）に描かれた仏画であり、現在の韓国美術史において重要な古典絵画に位置付けられている。しかし、現存が確認されている高麗仏画は160数点と少なく、その大多数が日本で所蔵されている。金慧印氏が研究対象とする浅草寺蔵の水月観音像（以後、浅草寺本）も日本で所蔵されている高麗仏画の一つであり、現存する高麗仏画全体の中において特異性のある傑出したものとして知られている。

浅草寺本の特異性は緑色に彩られた舟形光背によって際立っているが、現存する他の独尊像の水月観音像がすべて坐像である中で浅草寺本が唯一の立像であること、赤色で彩られていることの多い裾が淡い橙色であることなどの特異性が明瞭である。しかし、金慧印氏はそれらの特異性に加えて暗喩的に表現された月光が浅草寺本を傑出した1点にしているという。典型的な水月観音像における月光は、水面に反射した月光が岩坐の下面に当たっている状態を金泥で彩色するという技法で表現されているが、立像の浅草寺本には月光の反射を受け止める岩坐が描かれていない。金慧印氏の研究は、画面全体から醸し出されるかのような浅草寺本の月光がどのような彩色表現によって生み出されているのかを解明し、自ら描く復元模写によって実証したものである。

金慧印氏は入念な観察の結果、暗い背景に施された微妙なグラデーションと水月観音が纏う衣や肉身に施された白色が浅草寺本に月光の雰囲気や醸し出しているという仮説を立てた。背景のグラデーションは海の水平線の上空でもっとも明るく、上方に向かうに従って暗くなっているが、金慧印氏は、その様子が実景に通じるものであり、現代人にも感得できる月夜の光景を演出していると指摘する。また、暗い背景の中に立つ水月観音が纏う白衣や肉身に施された白い照り限がハイライト効果を生み出していると指摘する。

金慧印氏は、そうした特徴を古典的な絵画材料と技法で表現する復元模写に描くことで、浅草寺本が描かれた当初の表現効果を検証した。従来の復元模写は、失われた色と形を美術史的な考察や科学分析をもとに推測し、推測に則って描くものとなってきたが、本研究における復元模写は月光を感じさせる画面を目指したものであるため、色と形のバランスや統合が求められる。金慧印氏は、月光を感じさせる最終的な画面をイメージしながら、そこに至るための技法と工程を探り当てるためのサンプル実験を繰り返し、原寸大の復元模写として統合していった。完成した復元模写は、暗い中に柔らかい光を感じさせる空間に水月観音像が浮かび上がる精緻な画面となった。調査から得られた情報を技法や材料に還元し、デリケートな表現効果を演出することは、知識と技術の専門性を必要とするものであり、金慧印氏の復元模写を博士の学位に相当する研究作品として評価する。

(総合審査結果の要旨)

浅草寺本の水月観音像は、他の水月観音像にはない、立像である事や大きな緑色の舟形後背を持つことなどの特異性と高い芸術性を併せ持っている点が特徴である。

本研究のテーマは、浅草寺本は水月観音の名称が付けられているのかにかかわらず月を描かず、如何に月光表現をしているかを検証してみるところにある。一般的に水月観音という名称が付けられている作品にもかかわらず「月」が描かれていない作品は意外と多いが、間接的には殆どの作品は、月を感じさせる表現が行われている。例えば、観音が座っている岩の水面に近い部分に金泥を多用し月光を表現するなどしている。

ところが本作品においては、水面上に月の光を受け止める岩なども描かれておらず、その他月を具体的に表現しているものの存在すら見当たらない。特に現状では、全体が茶褐色に変色が進み描かれた当初の姿を想像する事が不可能になってしまっている。そこでこれらの変色を取り除いた、復元模写を行う必要があり、その事により月を感じさせる彩色表現が解明できるのではないかと考えた。水月観音と呼ばれる根拠の解明を行うために、出来るだけオリジナルに近い材料による復元を行うため、絵絹や地色の吟味もサンプルを沢山作り慎重に行なった。

復元模写をするにあたり、浅草寺本をよく観察すると他の水月観音像とは異なる点に気がついた。浅

草寺本は、裾や衣の先や顔の部分には白色顔料が多く使われ、月を感じさせるハイライトの効果を巧みに表している。また、上空から水面に向けて月光が降り注ぐ表現を、上から下に向けて明るくなるグラデーションも用いており、月を描かずして見事に降り注ぐ月光の微妙な表現を巧みに感じ取り表現に至った。その他の細部においても、非常に緻密な表現の復元にも一つずつ丁寧に再現していく事により密度の高い表現に繋がった。特に月を描かずに水面に月の気配を感じさせる表現に成功したのは見事で、復元しなければ分からなかった真の水月観音像の美しさを醸し出している。若干ペース配分を間違え最後に慌ただしい時間を過ごす結果になったが、これらを解明できたのも困難を乗り越って復元模写に挑戦し、諦めずに完成させた努力は大いに評価できる。最初に困難と思われていた復元研究を完成させる事ができたことの意義は大きく、浅草寺本の他にはない特異性の中の魅力の一端を解明することができ、今後の高麗仏画研究の指標になるものと考えられる。